

その頃 中学生・女学生たちは…

国民学校を卒業したら、もう大人扱い。国を守る労働力の一つと考えられていた。勉強をしたくて入った上級学校で、彼らを待っていたのは——。そして彼等の1日は——。

働き盛りの男性が戦争にとられ、年寄りや小さな子どものいる家庭は縁故疎開し、国民学校の学童たちは、集団疎開で地方に散っていったあとは、国民学校高等科、旧制中・女学校の生徒たちも、都市の銃後を守るようになった。まだ12～16歳の子どもの肩にのしかかってきたものは大きい。

家庭にあっては家族を守り、地域にあっては防空壕掘りや菜園づくり、建物疎開の手伝い、空襲になると罹災者の救護も担う。

学校にあっては、勤労働員が日を追って多くなり、勉学をするより軍需品を作ることの方が多くなっていった。20年4月からは、とうとう1年間の授業停止となり、自宅から直接動員先の軍需工場などに通うことになった。その年中学・女学校に入学した新1年生は、ついに終戦まで正規の授業を受ける機会を持てなかった。親しい友だちとも別れ別れになって、ただひたすらお国のために働くのみであった。



●富士の裾野に行つて教練。厳しい先生の目が光っている（8年頃。中野中学校「中野学園35年史」より）。

学徒勤労働員

戦争は長期化してゆき、多くの人々が出征していった。軍需工場は生産性を高めなければならず、食糧の自給化もめざされ、労働力の確保は重要な問題であった。国は国民徴用令を公布し労働力の確保につとめたが、太平洋戦争の開始とともにその不足は決定的なものとなり、学生による労働力補強が始まった。

すでに昭和12年末頃から国民精神総動員運動の一環として勤労による国家奉仕が強調されていたがまだ精神運動の面が強かった。しかし14年になると勤労作業は恒久化し授業時間扱いがされるようになった。しかしこの頃はまだ1週間程度であったが、16年になると1年を通じて30日以内は授業のかわりに作業をするようになった。そして18年6月に「学徒戦時動員体制確立要綱」が出され学徒の軍需工場への動員が本格化された。このことにより30日間という限界も事実上なくなってしまった。そして9月からは中学生徒にも適用されていった。さらに18年10月からは動員期間が4ヵ月に延長されたが戦局の不利によって19年3月には通年動員が指示され、7月には国民学校高等科、中学校低学年の動員と深夜業の強化が決定された。敗戦の色こなくなった20年3月には「決戦教育措置要綱」によって、国民学校初等科を除いた学校では4月から1年間授業が停止されることが決った。

勤労働員と学校生活

当時区内には高等学校1校、中学校4校、高等女学校8校、実業学校5校などがあった。どの学校の生徒も勤労働員にかり出されたが、動員が本格化し、ほとんど授業が受けられなくなるのは、19年頃からであった。それまでは、防空訓練、武術訓練、徒歩遠足などの鍛練、校庭をたがやしてつくった農園での作業や1週間前後の工場動員などの勤労作業が、学校生活の中でかなりの割合を占めていたが、勉強は続けられていた。

勤労働員は、そのほとんどが軍需工場であり、その工場へは、学校単位でまとまって、数名の引率教師とともにいった。工場が近ければ自宅からの通勤であったが、工場が遠い場合や工場が疎開した場合は、長期合宿勤労働員となった。また、学校に機械を入れ、熟練工の指導のもとに生徒が作業するという、学校工場もつくられた。動員にはある程度の日当と交通費が支給されるという事だったが、実際に支払われたかは、はっきりしない。生徒たちは、週1回の登校日以外は、朝8時から10時まで、男子学生は学生服にゲートル姿で、女子学生はセーラー服にモンペ姿で慣れぬ作業に汗を流した。

また、軍需工場への動員のほか、近郊農家へ麦刈り、じゃがいも掘りなどの農作業の手伝い、爆弾が落ちた後の穴埋め、防空壕掘りなど、さまざまな作業に生徒たちは動員されていった。



●学徒勤労働員。みんな一生懸命、さぼるものなどいない



●女学校の生徒も重労働

●都立武蔵中学校の19年度

昭和19年度

- 4月3日 入学式 入学者255名
- 5月30日 校旗、学年旗奉戴式
- 31日 本日より毎日朝礼時「健康ブラシ」使用の乾布摩擦。4年生中島航空金属会社田無工場に長期合宿勤労働の出動の壮行式(週1回登校授業す。以後長期勤労働の場合同じ)
- 6月20日 3年生本日より10日間田無、小平2班に分かれ農家の麦刈に勤労働
- 7月24日 夏期休暇制が廃止され、授業・勤労働・錬成の3部立てとなる。
- 8月8日 プール兼用貯水槽竣工式
- 9日 4年生中島航空金属会社にて退所式
- 11月22日 全校行軍、1・2・3年生市民公園往復
- 24日 本校東南20メートルの路上に焼夷弾落下、径7メートル、深さ2メートルの弾痕、本校窓ガラス80枚破損
- 27日 3年生に長期勤労働員令。3班に分かれ、第一班40名第一陸軍造兵廠に勤労働
- 28日 3年生第二班49名大日本時計会社に勤労働
- 12月3日 油脂焼夷弾落下、渡廊下2間焼失
- 7日 情勢緊迫の為本日より3日間生徒だけ休業の通達あり、職員は宿泊警備
- 1月6日 3年生第三班秋草綱帯株式会社に勤労働
- 1月21日 開校記念日
- 3月28日 卒業式(旧制4年制)
- 29日 2年生の一部東京瓦斯会社に4月20日まで勤労働

(「都立武蔵丘高等学校35年史」より)



●校庭で軍事教練。中でも剣道・武道が多かった

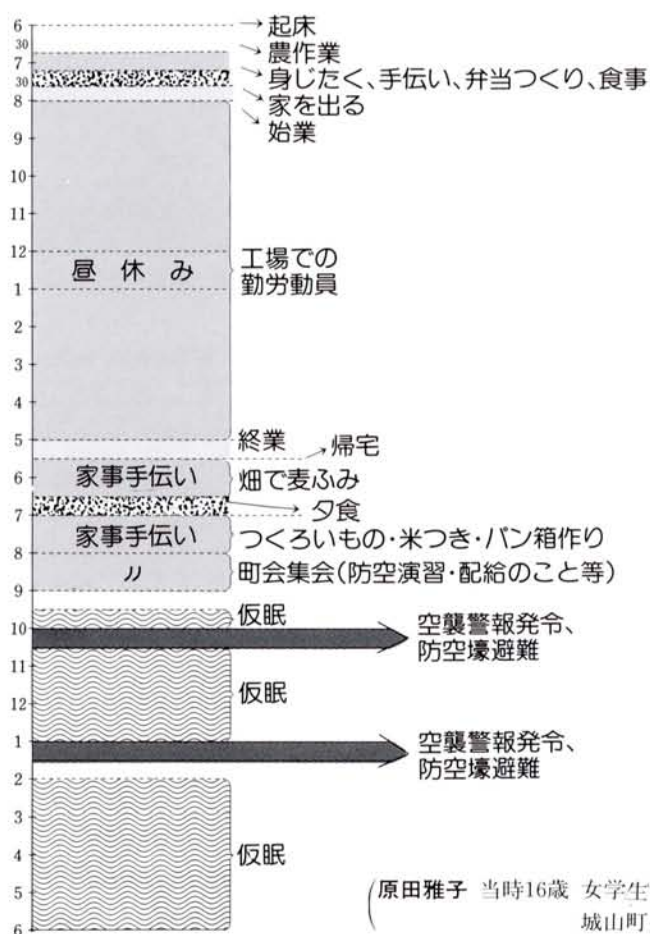
区内学校学徒動員一覧

(注)この表は、判明分のみ掲載

	勤務動員先	職種	勤務期間	人数	学年	特記事項	
(旧)現在学校名	日本無線会社	真空管製作	昭和19年8月25日 20.3.28 20.4.9 20.8.17	223 120	4 卒業生	①不明である ②秋草綱帯株式会社における職種の記録は記録がなく不明である	
	中島航空金属会社田無工場	鍛造部門	昭和19.5.31 19.8.9	223	4		
	都立武蔵中学校	第一陸軍造兵廠	昭和19.11.27 20.8.17	140	3		
	大日本時計会社	時計作成	昭和19.11.28 20.8.17	49			
	秋草綱帯株式会社	綱帯作成	昭和20.1.6 20.8.17				
	都立武蔵丘高等学校	石神井農業会社	石神井川改修	昭和20.6.28 20.7.16	100		3
	東京瓦斯会社	疎開家屋メータ取はずし	昭和20.3.29 20.4.20	100	2		
	日本通運会社	運搬	昭和20.4.11 20.4.30	30	2		
(現)堀越高等学校	横河電機 K.K.	組立工	昭和19.4~20.3	120	5		
	立川飛行機 K.K.	プロペラ製造工	昭和19.5~20.8	120	4		
	日本カボック K.K.	救命具製造工	昭和19.6~20.8	55	3		
	日本光学 K.K.	レンズ研磨工	昭和19.6~20.8	55	3		
藤倉電線 K.K.	特殊兵器製造工	昭和19.9~20.5	110	2			
(現)都立立見宮政高等学校	大田区日東レコード会社軍特殊工場	⑤	住込み作業19年4月~20年5月その後50人は校内戦時託児所に奉仕	100	専攻科	①大田区日東レコード会社内に特に要生保護(弱いと認められた者)但し中野区杉並区より特に	
	学校内軍需工場	蚊帳修理	昭和19.9~20.8	300	4		
	軍特殊学校	除け	19.4~20.5	50	各学年		
	東部軍司令部(乃木神社附近)造幣局	書類整理	昭和19.1~19.3	300	4		
	中島飛行機製作所(田無)	部品製造	19.4~19.8	"	新4		
	オリエンタル写真工業	軍用印画紙つくり	"	"	2		
昭和製薬(大久保)	注射液	"	"	1			
(現)中野高等学校	福生飛行機整備師団	飛行機整備	昭和19.5~20.2	約130	5		
	立川飛行機研究所	お手伝い	昭和19.5~20.3	約160	4		
	都内各所	防空壕掘り	"	"	"		
(現)立川飛行機	立川飛行機	労務組立作業	昭和19.9.1 20.7.31	延97	3.4		
	中島飛行機製作所	旋盤工ボール盤工	昭和19.4~19.9	300	5 3		
(現)昭和高等学校	中神飛行機製作所	同上	昭和19.10~20.8	200	不明	記憶による	
	中央工業南部工場	同上	昭和19.10~20.8	80	2		
	東洋ファイバー	同上	昭和20.1~20.4	80	2		
(現)田中高等学校	赤羽衣服廠		昭和19.7.1~		4.5		
	三越縫製工場		昭和19.7.21~		4.5		
	日本無線		昭和19.8.5~		3		
(現)都立富士高等学校	中島飛行機製作所	荻窪工場	昭和19.9.1~		5		
	立川飛行機製作所		昭和19.9.1~		4		
	北辰電気製作所		昭和19.9.1~		4		
	東芝製作所	配電盤組立て			3		
	柳製作所	学校工場			3	専攻科	

(「中野区史(昭和編一)」・「宝仙学園50年史」・「都立富士高校創立六十年記念誌」より)

女学生のある1日 (昭和20年3月×日)



(原田雅子 当時16歳 女学生 城山町)

- 午前 6:00 起床。
- 6:30 畑に出て菜っ葉についた害虫とり。
- 6:45 身じたく、手伝い、弁当づくり、食事。
昨夜も空襲におびえてなかなか寝つかれず、寝不足の朝を迎えた。母が私達のために苦心してよりわけ食べられるように手入れした雑穀の中にやっと白いお米が見つかる様な朝食をもくもくとして食べる。
- 8:00 工場の朝は早い。冷え切った手をこすりながら仕事にとりかかる。
- 12:00 中味は貧しいながらも友と一緒に楽しい昼食。
- 午後 5:30 帰宅。
- 5:30 夕食前の1時間、畑で麦ふみをする。
- 6:30 夕食。
- 7:00 家族のつくろい物をした後、あすの朝食用の米つきをする。空ビンに入れた米をビンを割らないようにするのは、かなり根気を要する。
- 8:00 町会集会所であすの防空演習・配給についての説明を受ける。
- 9:00 毎夜の空襲でほとんどじっくり眠ることができないので早めに床につく。
- 10:00 眠りについたと思う間もなく空襲警報発令で防空壕へ。30分で解除。
- 10:30 疲れ切って床へ入る。
- 1:00 眠り込んだところへまた空襲警報発令。20分程で解除。
- 1:30 服を着たまま床へ入る。

VOICE 学校と動員

英語の教科書を焼く

19年だったと思いますが女学校2年の時に英語は敵国語だからやらなくていいと、で英語の教科書をみんなで校庭に山積みして燃やしたんです。英語の先生がとてもすてきな先生だったんだけど、いつの間にか学校から姿を消してました。おかげで今も横文字に弱くて。私たちの年代で横文字に強い人は独学ね。

(匿名・女学3 江古田)

ある日突然愛国百人一首

中学生の時に、それまで暗誦していた百人一首がある日突然に愛国百人一首になったんです。あれには面喰いました。

(竹中俊祐・中2・城山通)

救助袋と三角巾

女学生は全員校庭に並んで三角巾の使い方を家庭科の先生に教わるんです。足や手、頭の包み方。この三角巾は薬といっしょに救助袋に入れていつも持って歩いていました。今のポシェットね。自分たちで縫って。いつでもケガ人がいたら役に立とうというわけ。

(下野和子・女学1・宮園通)

将校さんの服を作る

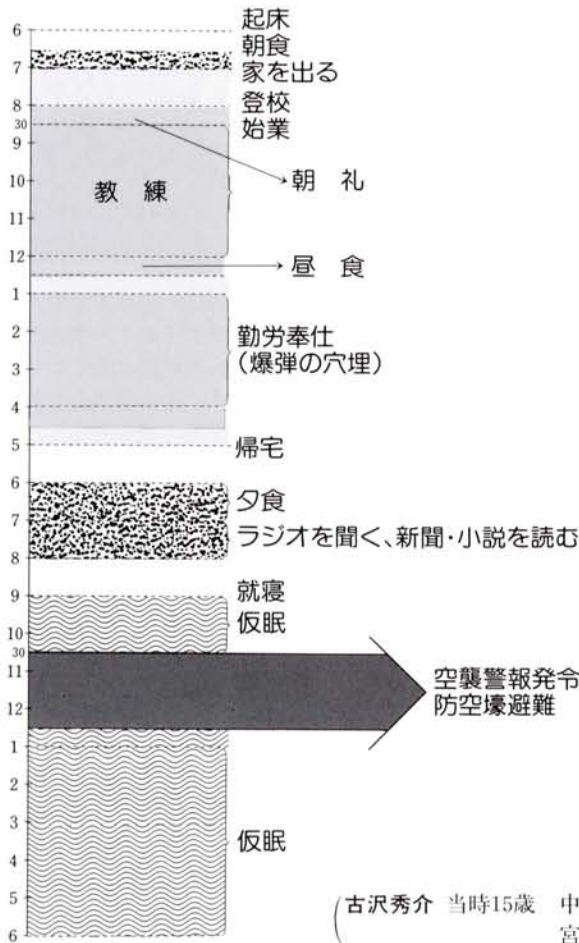
三越の軍需工場に行って将校さんのすごくいい服作ってたんですけど、冬は寒くてミシン踏む足も手もかじかんで、でもアイロン使うから、それをひっくりかえして、上に代用食のお弁当乗せて温めておくの。生活の知恵ね。

(原田雅子・女学3・城山通)

飛行機の部品を作る

女学校3年の時に立川の先の昭和飛行機というところに動員に行きました。いろんな学校の人がいて遠い人は寮に入りましたが私は通い。最初は小さな部品に穴を開けたり、やすりでこすったりの仕事でした。男子生徒は旋盤とか溶接やらされてましたね。学生は工具さんたちより30分遅く行って30分早く帰るんです。私たちのところは昼食は出たんだけど、

中学生のある1日 (昭和20年4月×日)



(古沢秀介 当時15歳 中学生 宮園通)

- 午前 6:00 起床。
- 6:40 朝食。
- 7:00 学校へ。ゲートルを巻いて家を出る。電車は工員さんでいっぱい。
(学校が中央線阿佐ヶ谷駅より徒歩20分位で、家より40分位かかって通学)
- 8:00 学校は朝礼から始まる。校長先生、配属将校の訓話があり、朝の体操で朝礼が終る。
- 8:30 午前中の授業が始まる。45分授業で10分休み、午前中4時間の授業があるが、ほとんど毎日1時間は教練か学校農園の農作業がある。
- 12:00 昼の弁当を食べ終ると、勤労奉仕に出る。3月~4月に荻窪の中島飛行機工場に米軍の投下した1t爆弾が、その附近の住宅地に点々と落ち、その穴理に行く。穴は直径10m位、深さ5~6mもある。夕方までやっても1ヵ所が終らなかった。
- 午後 5:00 帰宅。
- 6:00 夕食。
- 7:00 夕食後はラジオを聞いたり新聞や小説を読んだりして、学校の勉強はほとんどしない。
- 9:00 就寝 このところ毎夜、空襲警報が発令されるので、服を着たまま、床もたたむのも大変なので押入れて寝る。
- 10:30 今夜も警戒警報発令のサイレンが鳴るとすぐラジオをかける。東部軍管区情報で南方海上より敵機数編隊本土に接近中。すぐに空襲警報のサイレンが鳴り、B29の爆音が聞こえて防空壕へ入る。空襲警報の解除まで2時間位かかる。
- 午前 0:30 空襲警報が解除されたが、また発令されるといけないので、ゲートルだけ取って、そのまま寝る。

あゝお赤飯だと思ったらコウリヤンのご飯だったり。隣が立川飛行場だったからよく空襲されて、学生はみんな桑畑に逃げたものです。結局男子生徒が2人亡くなりました。

(藤井典子・女学4・野方町)

食糧運び

八王子の陸軍糧秣廠へ勤労働員に行っていました。仕事は味噌や醤油や缶詰を山の中に運ぶんです。物資を一時避難させるわけ。これが重くて、1箱45kg位あるんですから肩にくい込んでね、いつか袋が破れて中のものがポロポロ出てきたんです。大豆の絞りカスなの。兵隊に聞いたら、満州へ送る肥料だと。あれと同じものを米の代わりに配給になったことあるんです。肥料を食べてたんですね。

(大塚敏行・中1・野方町)

学徒出陣



● “行ってまいります” (毎日新聞社提供)

戦局が厳しくなり、戦場における戦闘員の絶対数が減少してくると、学徒への動員が始まった。

18年9月22日、それまでとられていた「法文科大学生の徴兵猶子」の廃止が閣議で決定。ただちに10月21日「出陣学徒徒行大会」が神宮外苑競技場で盛大に挙行された。東京近在の77校の学徒、数万人が

分列行進を行った。そして第一陣が入隊したのは12月1日であった。

このようにして出陣した学徒は全国で30万とも40万とも言われている。中には数ヵ月の訓練ののち、特攻隊員として戦闘機もろとも敵陣に突撃して散っていった若者もいた。区内の学徒出陣についての資料はない。

文芸作品にみる

中野の戦災

永井荷風

作家。(明治12~昭和34)
別号断腸亭主人。「すみだ川」「つゆのあとさき」等。東京生れ。

4月26日。東中野駅附近の古書肆白紙堂の主人、予が住吉町のアパートに移居せしを知り、人を介してポールモランの著書其他23冊を贈来り、色紙三葉に予の墨蹟を請ふ。この日同宿の人より飴100匁(27円)、牛肉100匁(25円)を買ふ。

4月27日。晴又陰。アパート4月分会計左の如し。

部屋代	金	38円也
電燈料	金	83銭也
水道料	金	1円83銭也
電話維持費	金	57銭也
町会費	金	50銭也
隣組会費	金	50銭也
雑費	金	1円也
ラチオ	金	1円也
新聞代	金	3円也
計	金	47円23銭也

5月初一。晴。午前中水道涸渴す。去月15日大空襲ありてよりガスなくなり、毎日炊事をなすに取壊し家屋の木屑を拾集めて燃すなり。戦敗国の生活、水なく火なく、悲惨の極みに達したりと謂ふべし。

5月初三。くもりて風甚冷なり。新聞紙ヒットラ、ムツリニの二兎戦ひ敗れて死したる由を報ず。天網疎ならず平和克復の日も遠きに非らざるべし。

5月初八。くもりて風猶冷なり。去3月初家を失ひてより後わが残生更に一段の悲惨を加ふるに至れり。今朝アパート宿泊人一同東中野停車場附近取壊家屋の跡片付に微発せらる。予はかくの如き力役に馴れざるを以て電話にて某氏を呼び代理をなさしむ。(略)

5月25日。空晴れわたりて風爽かに、初て初夏5月になりし心地なり。室内連日の塵を掃はむとて裏窓を開くに隣園の新緑染めしが如く、雀の子の巢立ちして囀る声もおのづから嬉しげなり。この日子は宿泊人中の当番なれば午後止むことを得ず昭和通56町先なる米配給所に至り手車に米玉蜀黍2袋を積み載せ曳いてかへる。同宿人の中江戸川区平井町にて火災に罹り其姉のアパートに在るを尋来りし可憐の一少女あり。年14、5歳なれど、言語挙動共に早熟、一見既に世話女房の如し。予を扶けて共に車を曳く。路すがら中川辺火災当夜の事を語れり。是亦戦時の一話柄ならずや。日暮れて後菅原氏の居室にて喫茶雑談に耽る時、サイレン鳴響き忽空襲を報ず。予はいはれなく今夜の襲撃はさしたる事もあるまじと思ひ、顔油断するところあり。草稿日誌を入れしポストンバックのみを提げ、他物を顧みず徐に戸外に出て、同宿の児女と共に路傍の窠に入りしが、何ぞ図らん。爆音砲声刻々激烈となり空中の怪光窠中に閃き入ること再三、一種の奇臭を帯びたる烟害に入っ

て鼻を突くに至れり。最早や窠中に在るべきにあらず人々先を争ひ路上に匍ひ出でむとする時、爆音一発予の頭上に破裂せしかと思はる、大音響あり。無数の火団路上到るところに燃え出で、人家の垣塙を焼き初めたり。予は菅原氏と共に燃立つ火焰と騒立つ群集の間を逃れ、昭和大通上落合町の広漠たる焼跡(4月中罹災の地)に至り、風向を見はかり、崩れ残りし石垣のかけに熱風と塵煙とを避けたり。遠く四方の空を焦す火焰も黎明に及び次第に鎮まり、火勢も亦衰へたればおそろおそろの煙の中を歩み、わがアパートに至り見るに、既にその跡なく、唯瓦礫土塊の累々たるのみ。菅原氏が日夜弾奏せしピアノの如き唯金線の一団となり糸のやうにもつれしを見るのみ。昨夜逃入りし窠のほどりにアパート同宿の男女一人一人集り来り、涙ながらに各その身の恙なかりしを賀す。予は菅原氏と共にひとまつ杵屋五束の家に行かむと思ひ、余烟濛々たる戸塚、大久保、新宿の町々を歩み、代々木の大通に至り見るに、こゝも亦中野と同じく見渡すかぎり焼原となれり。(略)

5月27日。晴。午前菅原氏東中野の町会に行く。夕刻帰り来りて語るをきくに、アパート同宿人の中男4名行衛不明、女1名失明したり。家なき人々は大方国民学校内に收容せられたり。住吉町附近死傷者少からざる由なり。(略)

(『断腸亭日乗』より)

永井荷風は、それまで住んでいた麻布の「偏奇館」を3月10日の下町大空襲で焼亡し、4月15日、友人(文中の菅原氏)の住む東中野(住吉町23)の国際アパートに移り住む。ところがこゝも5月25日の山の手大空襲で焼失。以後友人宅を点々とし、兵庫県でも罹災の後終戦を迎える。「断腸亭日乗」は一代の日記で、作品をしのぐ名著といわれている。山の手大空襲被災当時、すでに66歳であった。

芹沢光治良

作家。(明治30~)。元ペンクラブ会長。「巴里に死す」「人間の運命」等。静岡県生れ。

その夜、12時近く空襲警報でおこされた。月はないが、星の鮮かな夜であった。次郎は防空服装をして、一先ず次女と待避壕に避難した。最近では夜間空襲はいつも低空で波状攻撃が多いので、爆弾や高射砲の響きにもなれて、どんなに激しくても驚かない。どのくらい待避壕にいたか、爆弾や高射砲の唸りのなかに、ばちばち物ははじける音がする。たしかめようと、待避壕から出た瞬間、その場に次郎は凍んだ。空が真赤で昼間のようだ。わが家も火を映して真赤である。目の前の戸山が原から大久保にかけて、一面に火を噴きあげてさ

かんに焔がごうごう音響をたてながら燃えている。その上をB29が1機すれすれに低空でとんで行くが、花火の束が次々に落ちたとたん、すぐ坂下の大町市場から小滝橋の方へ火炎が走るようにして、一斉に家々が燃えはじめた。

「大変だ、洋子、逃げるんだ」

そう叫んだ時には、次女は非常袋を肩からかけて、バケツを1つさげ、次郎のそばに立っていた。(略)

恐れた最後の場合が来ないですんだことを、次郎達が知らされたのは、3時半を過ぎていた。4時間近い空襲であった。わが家は焼けたものと思ひながら、急いで、富豪の屋敷を出た。東中野の方へ出る道には、煙が流れて、住吉町、小滝町の辺はまだ燃えていた。落合通りから東中野駅へ出る道の十字路に、消防車がおかれて、風呂屋の前の水道に、ホースをつけてあるが、ホースは長々と道路におかれたまま、消火する人はいない。三越青年寮のそばまで来て、ようやく次郎達はわかった。住吉町、小滝町の一部は焼けたが、同じ小滝町でも、彼等の隣組の一角は華園園とともに焼けないで、炎の海のなかに半島のように突き出て残っていることが――

(『人間の運命』第三部第一巻「夜明け」より)

芹沢光治良は、昭和7年作家生活に入ると同時に中野区小滝町に移り住んだ。5月25日の震災後、軽井沢の別荘に疎開。当時48歳。34年に再び小滝町に新築移転。「人間の運命」は半生を描いた大著。

平林たい子

作家。(明治38―昭和47)。左翼系作家として戦前は度々入獄。「地底の歌」等。長野県生れ。

私は、中野の電信隊近くに住んでいたから、ある晩、電信隊から出征する中年の兵士の列をのぞきに行った。彼らは、なぜか銃剣に白い布を巻いて、わき上がる歓呼の中を、無表情で駅から輸送列車に乗った。近くの市民は、誰から聞いたともなく寄って来て、叫ぶように、「万歳」の声を兵士たちにあげせかけた。

戦争というものを、ほんとうにまだ経験したことのない東京市民は、ここ数年の重く重しい政治情勢が爆発して、いつそぎりぎりまでのほりつめたことに、かえってやぶれかぶれの感情解放を、感じているのかもしれない。

道の両側に手旗をもってならんでいる彼らは、ちぎれるほどそれを振っては、「万歳」をわめき立てていた。目には狂った光がそい、肉親を見おくっているわけでもないのに、わけのわからぬ涙さえあふれさせていた。

夢魔に憑かれた時とでもいうほかない、一種凄惨な激情の瞬間であった。

このころから、街には、日の丸が、やたらにはためいて、あらゆる音響物をかき鳴らすような興奮の中に、国中がひたされた。(略)

こういう社会情勢の中に立つと、戦争反対で自分の人生観をきたえ上げて来た私たちは、まるで異邦人みたいなものであった。言論にたいする当局の神経は、さらにするどくなっていたから、私たちのような作家は、自分の感じていることをおさえつけて、そ知らぬふりで遠まわしに語るよりほか、

仕方がなかった。思うことや感じることを表現できないほど、作家にとって悲劇はない。

(『砂漠の花』―「試練」より)

平林たい子の前半生は病氣と移転のくりかえして、中野区内に初めて住んだ昭和2年から、区内でも転々、西町、沼袋南、打越、中野駅前…。20年3月長野県に疎開するが、24年には再び江古田に帰居。以後は沼袋に永住した。終戦の年40歳であった。

壺井 栄

作家。(明治33―昭和42)。夫壺井繁治とともに左翼芸術同盟結成。繁治度々豊多摩刑務所に入獄。「二十四の瞳」等。小豆島生れ。

7月の中頃であったと思う。友人を誘って埼玉県の熊谷の親戚へ遊びにゆき、その帰りに、うんとこきと背負う程野菜を貰って来た。(略)帰りの汽車が赤羽へ着いた時、(略)私たちは思わず顔を見合せて笑い出してしまった。というのは、ホームを埋めるくらいの大勢の人たちが、誰も彼もみな野菜包みを持っているからである。

「まるで野菜列車ね」

私たちは野菜の小口帝都入りの状況を目のあたり見て感嘆し、そして自分達もその仲間の1人であることを大いに愉快がったり、恥しがったりしながら家へ帰って来た。茄子を5つ、胡瓜を2本にトマトを2つといった工合に組合せて近所隣りや友だちに分けると、もうどこでも歓声をあげてくれた。

(『野菜行列の弁』より)

壺井栄は、昭和16年に上落合から中野区昭和通に移居。翌17年に鶯宮二丁目に移り、戦時下の生活を送る。終戦当時45歳であった。

佐多 稲子

作家。(明治37―)。「キャラメル工場から」「私の東京地図」等。長崎県生れ。

中学生の息子は昼夜交替の軍需工場に動員され、小学生の娘は学童疎開、私の書く仕事も無くなってゆき、隣り組の割当てで、近所の工場へ弾丸の包装に出たり、防空訓練にも出た。町中住いの、もの書きの私の生活などは何も持つものがないから、窮乏は一般と同様、もっともはげしかった。(略)

そんな私も、娘が疎開先きから戻ってき、すぐ近くまで空襲で焼けたあとは、自分のそのままに無責任を感じ出した。こういうとき相談に応じてくれたのは壺井栄である。(略)私は壺井栄の世話で彼女の住む鶯の宮へ、一步疎開した。小さな娘と2人、荷物を肩に背負って運ぶとき、中井の駅前まで八重桜が満開であった。辺りが荒廃を極めていながら、花の美しさが印象深く、何かまるでこの世の最後でもあるかのように娘にむかい、この美しさをよく見ておけ、などと云ったことは、作品の中にも書いている。(略)こうして私は敗戦のとき、壺井夫妻の近くにいた。

(『時と人と私のこと』―「戦時中と敗戦のあと」より)

佐多稲子は、20年4月に鶯宮一丁目の壺井栄宅に同居するが5月25日の空襲は免がれる。22年には鶯宮町内で転居し、23年8月まで、中野で過ごしている。終戦の時41歳。